

## 帰って行く物語

今週の灰の水曜日からレント(受難節)に入ります。このシーズン、私たちはイエス様のご受難を偲び、イエス様をそのような目に遭わせた私たち人間の罪を思い、今の私たちを見つめて悔い改めの内に過ごしていくことがテーマとなります。今はその入り口とも言える時期を過ごしているわけですが、しかし私は早くも先週から礼拝で「悔い改め」をテーマにお話をしています。

このことについて、ある人は「気が早いのではないか」と言われるかもしれません。降誕節のシーズンなのだから、今はイエス様誕生の恵みの方をメインに語ってほしいと言われるかもしれません。しかしこの降誕節のシーズンにイエス様誕生の恵み、またその意味を思えば思うほど、それに応えられていない私たち人間の今の在り様と言いますか、そのギャップを思わされるのです。ロシアとウクライナの間では依然として戦争が続き、イスラエルとパレスチナの間では今もたくさんの人の命が奪われ、先月にはイランとパキスタンの間で越境攻撃の応酬がありと、至る所で戦争・紛争を繰り返している私たちです。私たちはいつまでこんなことを繰り返すのか。今こそ悔い改めが切に求められています。

なので降誕節最後の主日となります今日も、イエス様誕生の恵み、そのことにしっかりと触れながらも、改めて聖書というのがはたしてどういう内容の書物なのかということを考えていきたい、そしてそこから悔い改めということがこの世界に真剣に訴えていきたいと願います。

さて、そんな今日は聖書の中からエゼキエル書 33:10～11 を取り上げさせていただきました。このエゼキエル書という旧約の文書は、文字通り紀元前6世紀の前半にバビロンの捕囚の地で活動したエゼキエルという預言者の言葉を中心にした書物に他なりません。「エゼキエル」というのは「神は強める」という意味ですが、この預言者の名前がそのまま書名になっています。後の編集の手も多く認められますが、だいたい

はエゼキエル自身によって書かれたものであり、彼は捕囚の地にあつて、いわゆる文筆家的な活動をすることができていたようです。

皆さんの中には聖書の歴史についてあまり詳しくない方もおられるかもしれませんが、ここで旧約の民イスラエルの歴史を簡単に説明しておきましょう。このイスラエルの民、イスラエル民族がカナンと呼ばれる土地に入植し始めたのはだいたい紀元前1300～1200年頃だと言われています。そして紀元前1020年頃に、このイスラエル民族はサウルという人を王様にして、「イスラエル統一王国」と今では呼ばれる王国を創りました。この王国は次のダビデという王様、さらに次のソロモンという王様によって栄えるのですが、ソロモン王が亡くなった後、北のイスラエル王国と南のユダ王国に分裂します。紀元前10世紀後半のことです。その後、北のイスラエル王国は紀元前722年にアッシリアという国に滅ぼされてしまいます。その後、新バビロニアという国が興り、紀元前6世紀の初めに南のユダ王国も滅ぼされてしまい、王様や主だった人々がバビロンに連れ去られてしまいます。これが有名なバビロン捕囚です。

そしてエゼキエル書の書名にもなったこのエゼキエルという人物は、紀元前597年に行われた第一回捕囚の時にバビロンに連れて行かれて、そこで預言者として神様に召され、20何年にもわたって預言活動をしたのでした。彼はエルサレムが陥落し、神殿も破壊されてしまう紀元前587年まではユダとエルサレムの裁きの預言をしています。「神様に選ばれたはずの自分たちがこのように外国に滅ぼされてしまうのは、自分たちの神、ヤハウェが弱い神様だからではない。実にヤハウェは自分たちだけの神様ではなく、この世界を創造し、支配しておられる唯一の神様であられる。このように自分たちが外国に滅ぼされ、支配されてしまうこの世界史の出来事は、自分たちがこのヤハウェに背き、罪を犯したからだ。その裁き、懲らしめのためにヤハウェが他国の王たちを道具として用いておられるのだ。」

実はこのように考えたのは、エゼキエルだけではありませんでした。預言者イザヤも北のイスラエル王国がアッシリアに滅ぼされる歴史に直面してこのような裁きを預

言しましたし、エレミヤも南のユダ王国が新バビロニアに滅ぼされる歴史に直面して、バビロンに連れて行かれたエゼキエルとは違い、彼の場合はエルサレムに残されてですが、このような裁きを預言しています。

エゼキエルもこのような思想の流れの中で裁きの預言をしたわけですが、その預言が成就し、エルサレムが陥落した後は、彼は「見張り」として捕囚の民に悔い改めを呼びかけて、回復の預言をしています。本当に自分たちの罪を悔い改めて神様に立ち帰るならば、神様は自分たちを救ってくださる。新しいイスラエルを回復させてくださる。その希望の預言を語ります。

エゼキエル書で言えば1～32章が「裁きの預言」となっていて、33章以下が「救いの預言」という構成になっているのです。もちろん、これは大雑把な分け方であり、1～32章の中にも救済の預言があり、33～48章の中にも裁きの預言があるわけですが。

こうしたことを踏まえた上で今日の聖書箇所を読むと、その内容が良く理解できるでしょう。捕囚という神様の裁き、その中でイスラエルの人々は「どうして生きることができようか。私たちの背きと過ちが私たちの上であり、私たちは神様に裁かれて、やせ衰えていくのだ」という絶望の中にありました。しかしエゼキエルは神様御自身の言葉として、このように語ります。「わたしは生きている。わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることが喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。」このようにエゼキエルは神様の御心を伝え、イスラエルの人々に悔い改めを呼びかけたのです。

私は思います。「わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることが喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。……どうしたお前たちは死んでよいだろうか。」神様のこの御言葉はエゼキエル書のこの箇所だけでなく、聖書全体を通して聞こえてくる神様の御声ではないかと。

旧約聖書の創世記には、もともと神様に「極めて良」い存在として創られた人間が、蛇に唆されて、神様に「食べてはならない」と言われていた木の実を食べてしまう、いわゆる墮罪の出来事が記されていて、キリスト教ではこれ以降人間の中に罪が入り込み、人間は神様に従おうとしても従いきれない存在になってしまったとされるわけです。そして聖書には、この後何度も何度も神様が人間を救おうと、御自分のもとに帰そうとするのですけれども、そのたびに人間がその罪のために神様のもとからさまよい出て行ってしまう様子が描かれています。

本来ならばこのような人間は、神様に見捨てられ、滅ぼされてしまっても不思議ではないわけですが、神様は決して私たち人間を諦めません。ついには御自分の愛する御子イエス・キリストをこの世に送り、彼を十字架につけて私たちの救いを成し遂げられます。そして復活を通して私たちの死を滅ぼし、私たちにその愛をお示しになり、その愛で今も私たちを、また私たちのこの世界を変えていこうと心を砕かれます。そしてヨハネの黙示録で、キリストの再臨と、神様が新天新地をこの地に來たらせ、すべての人々を御自分のもとで永遠の命に憩わせる預言が為されて聖書という一連のお話が閉じられるのです。

「わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。……どうしたお前たちは死んでよいだろうか。」聖書全体の文脈の中から、神様のこの御声が聞こえてくるような思いがいたします。

このことに関連してヘンリ・ナウエンというカトリックの神学者が、私たちを決してお諦めにならない神様のこの愛について、ある著書の中でこのように語っています。「わたしたち自身の救いにかかわる曲がりくねった歴史を見ると、そこにわたしたちが神に連なりたいと望んでいるばかりでなく、神もまた、わたしたちに連帯したいと願い求めておられるのがわかります。まるで神がわたしたちに向かって叫んでおられるようです。『わたしの心はお前のうちに憩うまでは休まることはない、わたしの

愛する子どもたちよ。』アダムとイヴからアブラハムとサラへ、アブラハムとサラからダビデとバトシェバに、そしてダビデとバトシェバからイエス、そして現在に至るまで神はご自身の子どもたちに受け入れてほしい、と叫んでおられます。『わたしはお前たちを創った、わたしの愛のすべてをお前に与え、お前を導き、支え、お前の心の望みが満たされることを約束した。お前はどこにいるのか。お前の応答は、お前の愛はどこにある。お前がわたしを愛するようになるために、他にわたしは何をすべきなのだろうか。わたしはあきらめない。働き続ける。どれほどわたしがお前の愛を待ち望んでいるか、いつの日にかお前もわかるだろう。』

実に神様の愛は、諦めない愛です。御自分の御心が成る完成した世界で、私たちと愛し合う親しい関係に入りたいという熱烈な望み、熱烈な願いを持っておられます。そしてそのためなら見捨てるとか、諦めるとかいったことを決してなさいません。実に聖書というのは、神様のその愛の中で私たちが帰って行く物語なのです。神様の許に、私たちが創られた時の「極めて良かった」存在に帰って行く物語です。

では、ここで今の私たち人間を振り返ってみてどうでしょうか。早いもので2024年も2月中旬となりましたが、私にとって今年に入ってから一月半というのは人間の二面性というのを突き付けられる思いがした、そんな日々でした。皆さんもご存じの通り1月1日に能登半島で大きな地震があり、たくさんの方が亡くなられて、今も多くの人が苦しみの中に置かれています。本当に胸が痛む思いで、こうした災害が起これば、私たちは何とかして被災者を支えようと力を合わせます。生き埋めになった人を助けようと力を合わせ、また炊き出しをしたり、支援物資を送ったり、募金をしたりします。でも、その同じ人間がロシアとウクライナ、またイスラエルとパレスチナの争いで見られるように、たくさんの人々を殺すのです。

今年に入って特にこうした人間の現実を突きつけられて、「人間って何だろう」と考えさせられました。私たち人間は善悪を併せ持った本当にグレーな存在です。きっと大昔の天地創造や墮罪の物語を作った人々も、こうした人間のグレーさに「人間って

何だろう」と考えさせられたのでしょ。その答として、「いや、それはもともとは神様に良い存在として創られたんだけれども、罪が入り込んでしまっ今こうなっているんだ」というこうした物語ができたのかもしれない。

人間のグレーさが特に際立つ今だからこそ、私たちの悔い改めが重要です。今週の水曜日からレントに入りますが、十字架を通して私たちにその愛をお示しになり、今も私たちに「立ち帰れ、立ち帰れ」と呼びかけ給う神様の愛をしっかりと噛み締めながら、世界中の皆で神様のもとに帰って行きたいと願います。悔い改めを通して、皆でこの世界を神様の御心に沿うものへと変えていきましょう。

お祈りをいたします。 ——以下、祈祷——